View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第68号　2019　1－8

中国の大学入試における募集人員の地域配分に関する省別比較

小川佳万・小野寺香[1]・石井佳奈子[2]
（2019年10月３日受理）

The Provincial Allocation System in Chinese College Entrance Examinations: A Comparative Study

Yoshikazu Ogawa, Kaori Onodera[1] and Kanako Ishii[2]

Abstract: The available data for the current situation of admission process were analyzed by Chinese province as one of the characteristics of the college entrance examination system in China. The analysis aims to clarify the actual situation of disparities by province, which was often pointed out in previous related studies. As a result, the following three points were identified. First, even if the same exam questions were used in highly selective universities, differences in average passing score rate can be seen among the provinces. Moreover, these differences were almost fixed and did not depend on the year. Therefore, as one of the causes, we consider that each province has differences in the education level. Second, the quota allocation did not correspond to the number of examinees in each province; therefore, the quota system itself may create a gap. This is a serious problem because this obstacle cannot be overcome by students' efforts. Third, students of provinces that prepare their own exam questions tend to have the advantage in the selection process. Because the exam questions were created independently, it is not possible to easily compare the difficulty of the test questions with those of other provinces, which avoids some criticisms. Most of the provinces that have created their own exam questions are the advanced Chinese provinces with many universities, including highly selective and prestigious universities. These prestigious universities could be entered more easily by allocating capacity to the local students.

Key words: China, College Entrance Examination, Provincial Comparison, Gap
キーワード：中国，大学入試，省別比較，格差

はじめに

本論は，中国の大学入試制度における募集人員の省別配分に焦点を当て，それによって生じる合格最低点の省別格差の実態を明らかすることを目的とする。

日本を含めたアジアの近隣諸国が，いわゆる筆記試験以外の多様な方法で入学者選抜を積極的に行う改革を進める中で，中国はそうした傾向が多少みられるものの，依然として筆記試験である全国統一試験（原語，高考）の成績に基づく入学者選抜を主に実施している。それは膨大な数の受験生を短期間に選抜するという管理上の理由に加えて，筆記試験以外での選抜方法に対して，その公正・公平性について社会的な合意が十分に得られないためである。つまり，一点を競う激しい競争に対する批判はしばしば噴出するが，それに代わる，多様な選抜方法に対してはさらに激しい批判が向けられている。

ただし，公正・公平の観点からの批判は，現行の入試制度でも生じている。中国の大学入試制度において

[1]奈良女子大学アドミッションセンター
[2]広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

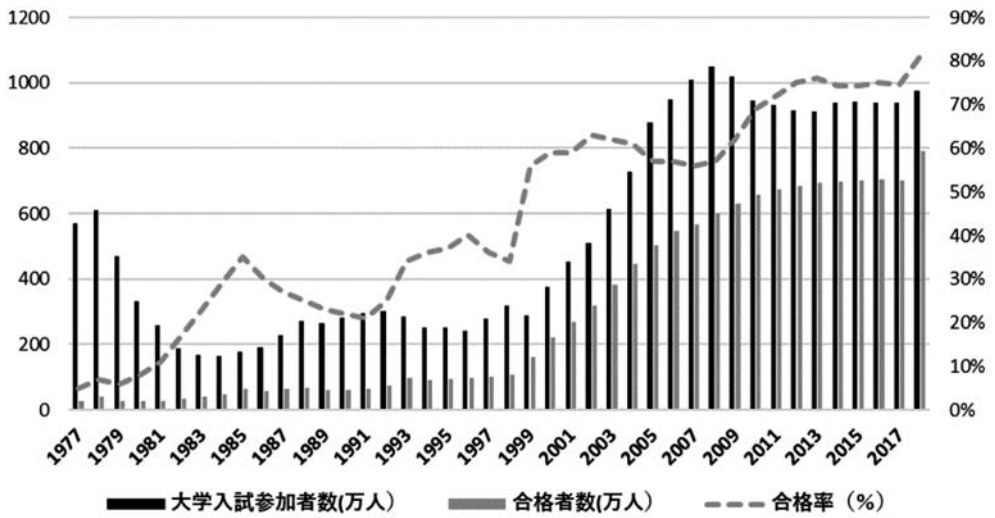

図１　中国の大学入試参加者数と合格者数
出典：新浪教育「1977-2014歴年全国高考人数和録取率統計」＜ http://edu.sina.com.cn/gaokao/2015-06-18/1435473862.shtml ＞をもとに筆者作成。

試験問題が省ごとに異なることや大学入学者選抜が省ごとに実施されていることは後述するが，それに関する先行研究の内容は次の二点にまとめられる。一つ目は合格に必要な学力水準の省間格差に関する研究であり，例えば**郜**（2017）は特定の大学を対象に入試での合格者の学力に省間格差があることを実証的に指摘しており，梅等（2017）は特に世界水準の大学に焦点を当てその受験機会の省間格差の実態を論じている[1]。また篩等（2017）は入試問題の難易度にも省間で差が生じていることを指摘している[2]。

二つ目は特定の受験生を対象とする優遇措置の実態について，唐(2015)は貧困地区の受験生を，楊等(2013)は少数民族の受験生を対象として論じている。ただしこうした研究は，研究論文の性格上やむを得ないことであるが，政策を分析するもの以外，対象を狭く限定しその範囲内で実証的に論じている。つまり，中国全体を対象として大学入試制度の現状を明らかにしたものは多くない。

本論では，中国において大学入学者選抜が省を単位として行われることによって生じる，合格に必要な学力水準の省間格差の実態を示すことを通して，その特徴を明らかにしたい。なお，本論で「省別」比較と述べる際，省と同じレベルである，北京市や上海市等の直轄市，さらに新疆ウイグル自治区や広西チワン族自治区等の自治区を含む。以下では，煩雑さを避けるため「省」と代表的に記す。

１．中国の大学入試の背景と特徴

（１）高等教育の拡大

中国の大学入試制度は日本と比較すると特徴的な点がいくつかある。そのため，まず本節では中国の大学入試制度の歴史や特徴等の基本情報を説明する。

図１は，全国統一試験が再開された1977年以降のその参加者数と合格者数，そしてそこから算出される合格率を示したものである。中華人民共和国が成立した1949年より４年後の1952年から全国共通問題による全国統一入試が開始されていたが，その後1966年からの10年間は「文化大革命」により，入学試験は廃止され，大衆による推薦方式の選抜制度が採用された[3]。しかし，この推薦方式は運用上で様々な欠陥が露呈したため，文化大革命が終了した1977年からは，文化大革命期の推薦方式から再び試験方式へと転換した。

図１から，文化大革命中に大学入試に参加できなかった人々が直後に一斉に受験しているために受験者が極端に多く，かつ合格率が低くなっているが，徐々にその影響も収まり合格率は高くなっていることがわかる。その後，「改革開放政策」の下1980年代から資本主義的経済改革が進行するとともに，「高等教育における改革も市場経済と同じく，政府の規制緩和，競争原理が基本方針とされ，（中略）市場ニーズに対応した人材の育成が高等教育に求められるようになった」[4]。

さらに1999年には国家発展計画委員会と教育部による「1999年高等教育の学生募集規模の拡大に関する緊急通知」や同年の教育部と国家発展計画委員会による「1999年普通高等教育の学生募集計画を拡大することに関する通知」等の高等教育拡大政策によって大学の入学定員が増加し，全体として高等教育人口が急増した。2017年には全国大学進学率は45.7％であり[5]，図１より大学合格率は70％を超えていることがわかる。

このように，文化大革命直後から現在にかけて，中国の高等教育の規模は拡大を続けている。こうした状況に鑑み，本論では中国で選抜性が特に高いとされる大学に焦点を当て，その合格者に必要となる学力水準に省間格差がどの程度生じているか明らかにする。

（２）大学入試の特徴①：グルーピング

中国の大学入試制度では入学者の選抜時期の違いにより，大学を一期校・二期校・三期校・専科学校というようにグルーピングしている。日本でも設置者別に国公私立大学という区別や履修年限に基づいた四年制大学・二年制大学といった区別があるが，大学入試制度の選抜過程という点では特に意味をなさない。しかし，中国の場合は大学のグルーピングが政府公認の下で大学入試制度の一部として位置づいている。

先述のとおり，大学は文理別に一期校（主に985大学・211大学を含めた一流大学：中国では一般に「一本」と呼ばれる），二期校（「二本」：四年制の一般大学），三期校（「三本」：四年制の民営大学），専科学校（二・三年制の高等教育機関）にグルーピングされている[6]。一期校の中の985大学は，当時の国家主席である江沢民の発案によって1998年5月に開始されたプロジェクトであり，世界水準の大学づくりを目指すものである[7]。985大学は，2019年現在39校存在する。211大学は，21世紀に向けて100校前後の高等教育機関及び一部の専攻分野に重点的に投資を行うというプロジェクトであり，1996年より開始された[8]。2019年現在116校存在する。なお，985大学は211大学にも包含される構造となっている[9]。

このグルーピングは，入試の選抜時期と大きく関連している。入学者選抜のプロセスは，まず11月から12月にかけて全国で統一試験の応募申請が行われる。統一試験は毎年６月７日から２日間あるいは３日間（省によって試験科目が異なるため）行われ，６月下旬には統一試験成績が公布される。またほぼ同時期に各省で一期校，二期校等のグルーピングごとの合格水準の成績が公表される[10]。それは，「一期校の総募集定員と受験生の得点を勘案して教育考試院が決定するが，それはあくまで全体の最低点なので，志望大学学科の倍率が高い場合，最低ラインを大幅に上回っていないと合格の可能性は低いことになる」[11]。一般的に，合格水準成績は各グループの総募集定員の1.2～1.3倍の規模になるよう調整される。合格水準成績が公表された後，数日間で受験生は志望大学に出願する[12]。その際，各グループ内で複数の大学・学科に出願することが可能である（江蘇省の場合は第三志望までの大学と各大学６学科まで出願可能[13]）。

その後，７月中旬に一期校，７月下旬に二期校，８月上旬に三期校または専科学校の選抜が行われる。このように大学のグルーピングは，大学の位置づけを表しているだけでなく，選抜時期にも関係している。

（３）大学入試の特徴②：定員配分制度

中国の大学入試制度では，各大学・各学科が各省に予め募集人員を配分している。この仕組みにより，広大な中国で大学入試のための受験者の移動を避けることが可能となる。また教育条件が都市部に比べて劣る地域や少数民族の生徒に大学進学の機会を保証するという意味で，中国では現実的で合理的な制度[14]と評価されている。

しかし，一方で問題点も指摘されている。2001年に山東省で３名の受験生が次の訴訟を起こした。彼らが受験した当時，北京の一期校合格最低水準成績は454点であったが山東省のそれは580点であった。大学入試制度においてこうした差を認めることは公正さに反するのではないかという主張である[15]。当時は山東省も北京市も同じ試験問題を使用しており（現在は異なる試験問題を使用している），入学試験成績が同点であったとしても受験した地域によって合否が分かれるという事態が生じていたのである。

そもそも大学・学科の定員配分の仕方をみると，例えば985大学では全国に定員を配分しているが，多くの大学では大学所在地とその周辺の省に多くの募集人員を配分している。そのため，受験生の居住地域によっては，受験機会自体が用意されない場合もあり得る。また，多くの大学が大学所在地やその周囲の省に定員を配分されるため，大学進学の機会が受験生の居住地域に影響されるという問題が指摘されている。

中国の大学入試制度の特徴の一つである定員配分制度は，中国社会にとって現実的で格差是正にも貢献する合理的なものである一方，受験機会を制限する仕組みでもあると言える。

（４）大学入試の特徴③：試験問題

中国では，大学入学試験は基本的に６月に行われる統一試験のみで合否を判定する。試験問題は中央政

府または各省政府が管理・作成しており，同一省の受験生は志願する大学に関係なく同じ試験問題を解答する。これは各大学が入試問題を作成しその成績によって合否を決定するよりも，政府によってコントロールされた選抜の方が公平，公正であるという考えが社会に根付いていることが理由としてあげられる。

表１　試験問題の種類と使用している省（2018年）

問題	使用している省
全国巻Ⅰ	安徽，湖北，福建，湖南，山西，河北，江西，河南，山東
全国巻Ⅱ	甘粛，青海，黒竜江，吉林，遼寧，寧夏，新疆，内蒙古，陝西，重慶
全国巻Ⅲ	雲南，広西，貴州，四川，西蔵
独自問題	北京，天津，上海，江蘇，浙江，海南※

出典：中国教育在線「2018年全国各地高考試題及答案」（https://gaokao.eol.cn/shiti/zhenti/201906/t20190608_1662930.shtml）を参考に筆者作成。
※海南省は語文（国語），数学，英語の試験は全国巻Ⅱを使用。

中国の大学入試制度の歴史は，建国から文革まで，また文革後に実施された全国統一入試は，文字通り「全国統一問題」であった。しかし，1985年に上海市で，2002年に北京市で導入されたように，省ごとに入試問題がつくられるようになった。2004年には，教育部は省ごとの作題を推進し，11省・市で独自の問題を作成するようになった。この傾向は2014年まで続いた。省独自の問題をおよそ半数の省が導入した要因として，中国の高等教育の大衆化段階における各地の経済的・文化的・教育的発展の不均衡と基礎教育改革が挙げられる。省独自の問題は各省の教育課程改革の進捗状況を反映させることが可能である。

しかし一方で，いくつかの課題も内包している。その一つが，試験問題の質が不安定であるという点である。いくつかの省では大学入試問題の難易度が不安定で，年によって難易度が極端に変動する現象が起きており（原語「大小年現象」），受験生や学校現場が困惑していた。さらに，2014年に国務院が公布した「大学入学試験制度改革の実施に関する国務院の意見」の中で，2015年からは全国統一の試問題験を使用する省を増加させることを奨励し，2015年に５省，翌年にはさらに７省が統一試験問題を使用し，2018年には25省に増加し，省独自の試験問題を使用するのは６省にまで減少した。

現在，ほとんどの省で大学入試の際に使用される問題は，教育部の試験センター（原語，考試中心）が作成したものである。試験センターが作成する問題は3種類存在し，それぞれ「全国巻Ⅰ」「全国巻Ⅱ」「全国巻Ⅲ」と呼ばれる。2018年の各省の使用状況は表1のとおりである。これらの問題は難易度別に区分されており，各省は諸条件を総合的に判断し使用する問題を選択する[17]。一般的に，全国巻の難易度は，難しい順に全国巻Ⅰ，全国巻Ⅱ，全国巻Ⅲといわれるが[18]，年によっては難易度の関係が変化する場合もある。

２．省別比較

（１）清華大学の平均合格得点率

先述したように，中国では省ごとに使用する大学入試問題が異なる。本節では，同一問題を使用する省に着目し，選抜性の高い大学の合格者の平均得点率を省

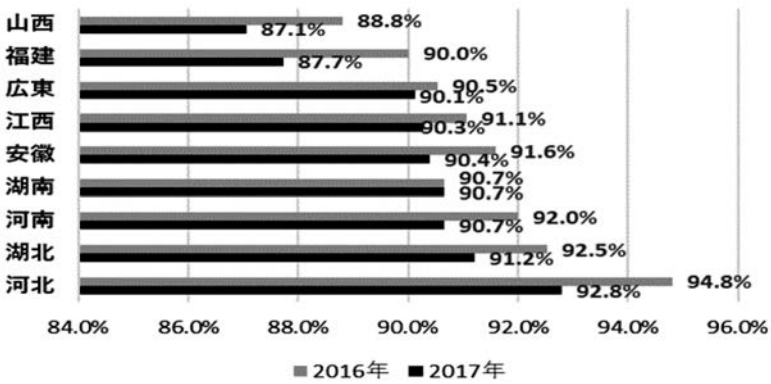

図２　清華大学の平均合格得点率（全国巻Ⅰ）
出典：陽光高考 (2019) より筆者作成。

間で比較する。これによって，同一大学の合格者に求められる学力水準に省間でどれほど差があるか確認する。

図２は，全国巻Ⅰを使用している省について，985大学である清華大学（理科）における平均合格得点率を示したものである。図２から，2016年と2017年の傾向は同様で，最も平均得点率が高いのは河北省であり，低いのは山西省であることが確認される。2017年は，山西省では清華大学合格者の平均得点率が87.1％（得点にすると653点）であるのに対し，河北省の合格者は平均得点率92.8％（696点）となっており，合格得点率の差は5.7％，点数にすると53点の差がある。

また，2017年の清華大学合格最低点（理系）は，山西省が646点であり，河北省は691点であった[19]。つまり，両者の合格最低点には45点の差がある。なお，2017年の河北省の受験生（理系）で646～690点だった者は2,058人存在する[20]。このように，同じ入試問題を使用している省の間で，合格得点率に差が生じている[21]。紙幅の関係上，全国巻Ⅰ以外の試験の省間比較グラフを示すことはできないが，全国巻Ⅱも全国巻Ⅲも全国巻Ⅰと同様の傾向がみられた。また，合格得点率の差は毎年ほぼ変動していない。各省の教育水準に応じた募集人員の配分がなされているためであると考えられる。

（２）985大学の定員配分

（1）では，清華大学の平均合格得点率が省によって異なることが確認された。以下では，985大学が各省に配分している募集人員の割合と，全国からみた各省の大学入試受験者の割合の関係を確認していく。それによって，（1）で示した平均合格得点率が省間で異なることにも考察を加えたい。図３は，2018年の全国の受験者のうち各省の受験者が占める割合と，985大学の定員のうち各省に配分された定員の割合を示したものである。985大学の入試区分には「本科」以外にも「事前（原語，提前批）」[22]という区分も存在する。また，「本科」のなかも「文科」「理科」「芸術」「体育」等複数の分類に分けられているが，今回は煩雑さを避けるため，一般的な「本科」のうち「文科」と「理科」の定員配分のみを表示している。定員配分の割合につい

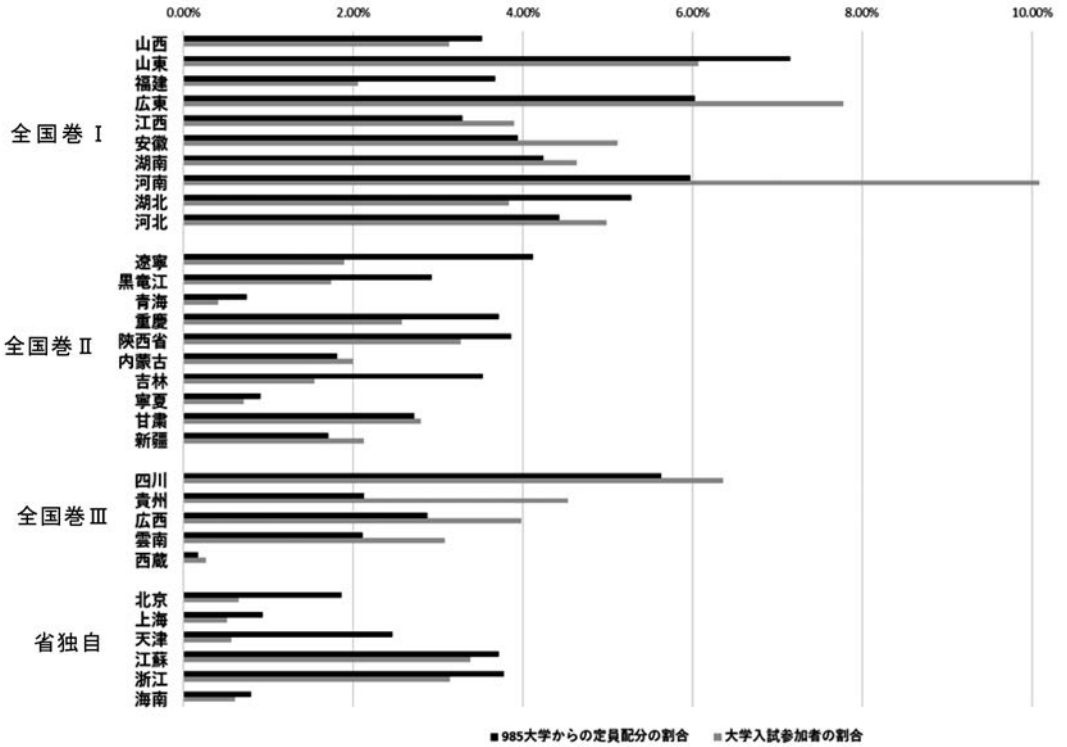

図３　985大学の各省への定員配分の割合と大学入試参加者の省別割合（2018年）

出典：定員配分の割合については各大学 HP より筆者作成。大学入試参加者の割合については中国教育在線「2018年各省高考報名人数及実際录取率」より筆者作成。

ては，各大学ホームページに記載されている入学生募集計画（原語，招生計画）を集計し，全体の定員数から各省に配分されている割合を算出した。

図３から，受験者の割合と985大学の定員配分の割合がほぼ一致している省も存在するが，多くの省では両者の割合に大きな差が開いていることがわかる。もっとも顕著なのは，河南省であろう。河南省は，中国国内で最も受験者数が多い省であり，大学入試受験者の10人に１人は河南省出身である。しかし，985大学の定員の割合は6%程度しか配分されていない。また，(1) で取り上げた全国巻Ⅰをみると，清華大学の平均合格得点率が最も高かった河北省は大学入試受験者の割合のほうが大きいのに対して，平均合格得点率が最も低かった山西省は985大学の定員配分の割合のほうが大きくなっている。つまり，合格得点率が省間で異なる背景には，こうした定員配分が大きく影響していると考えられる。

独自問題を作成している省に着目すると，程度に多少の差はあるが6省全て，985大学からの定員配分の割合が受験者の割合を上回っている。これらの省は，基本的に中国国内でも比較的学力水準が高く，省内に多くの大学が存在する。例えば，985大学39校のうち８校が北京市に所在している。大学は所在地とその周辺に募集人員を多く配分するため，北京市の受験生数は他の省よりも少ないが，定員配分の割合は高くなっている。また，独自問題を使用しているため，学力水準について他の省との単純な比較を行うことは難しい。

（3）一期校の合格最低ライン到達率

一期校の合格水準成績に達している受験生の割合を省ごとに示したのが表２である。表２から，省によって一期校の合格水準成績に到達した受験生の割合は大きく異なることが確認できる。最も割合が高いのは北京市の34.13%であり，最も低いのは雲南省の7.8%であった。つまり，北京市は大学入試受験者の約３人に１人が一期校の合格水準成績に達しており，一期校への出願が可能であるのに対して，雲南省の受験生は100人中７～８人程度しか一期校への出願ができる状況にない。募集人員が予め配分されていることによって，こうした状況が生じると考えられる。

また試験問題の種類に着目すると，省独自の問題を使用している省は一期校出願率が34.13～17.35%であるのに対し，全国巻を使用している省は24.81～7.80%で大きな差がみられる。例えば，省独自の問題を作成している天津市と全国巻Ⅱを使用している吉林省を比較すると，吉林省の志願者数は約15万人で天津市の志願者数は約５万人となっており，吉林省には天津市の約３倍もの志願者がいるが，一期校へ出願できた人数はほぼ同じであった。

また，全国巻のみに着目すると，一期校出願率は全国巻Ⅱ使用省が24.81～10.26%であるのに対し，全国巻Ⅲ使用省が13.45～7.8%であり，それぞれの巻を使

表２　各省の試験種類と一期校出願率等（2018年）

省名	試験種類	志願者数（万）	一期校出願者数（万）	一期校出願率
北京	省独自	6.3	2.15	34.13%
天津	省独自	5.5	1.85	33.64%
上海	省独自	5	1.45	29.00%
江蘇	省独自	33.15	9.32	28.11%
海南	省独自	5.88	1.21	20.58%
浙江	省独自	30.6	5.31	17.35%
福建	全国巻Ⅰ	20.09	4.19	20.86%
山東	全国巻Ⅰ	59.2	11.68	19.73%
安徽	全国巻Ⅰ	49.9	9.41	18.86%
湖南	全国巻Ⅰ	45.18	6.78	15.01%
河南	全国巻Ⅰ	98.38	12.26	12.46%
山西	全国巻Ⅰ	30.5	3.72	12.20%
広東	全国巻Ⅰ	75.8	8.77	11.57%
河北	全国巻Ⅰ	48.64	5.07	10.42%
湖北	全国巻Ⅰ	37.4	3.58	9.57%
江西	全国巻Ⅰ	38	3.38	8.89%
遼寧	全国巻Ⅱ	18.5	4.59	24.81%
黒竜江	全国巻Ⅱ	19.04	4.17	21.90%
青海	全国巻Ⅱ	5.1	1.02	20.00%
重慶	全国巻Ⅱ	25	4.77	19.08%
陝西	全国巻Ⅱ	31.9	5.66	17.74%
内蒙古	全国巻Ⅱ	19.5	3.16	16.21%
吉林	全国巻Ⅱ	15.03	1.99	13.24%
宁夏	全国巻Ⅱ	6.95	0.92	13.24%
甘粛	全国巻Ⅱ	27.3	2.8	10.26%
新疆	全国巻Ⅱ	20.74	-	-
四川	全国巻Ⅲ	62	8.34	13.45%
貴州	全国巻Ⅲ	44	5.23	11.89%
广西	全国巻Ⅲ	40	4.22	10.55%
云南	全国巻Ⅲ	30	2.34	7.80%
西藏	全国巻Ⅲ	2.53	-	-

出典：中国教育在線「2018全国各省一本录取率排名表」（http://gaokao.2018.cn/HTML/73956.html）を参考に筆者作成。

用する省のうち最も一期校出願率が高い省を比較しても，約11%の差があることがわかる。

さらに全国巻Ⅰという同一の問題を使用している福建省と江西省を比較してもおよそ12%も差が開いている。大学入試の合否に対して募集人員の配分が与える影響の大きさを確認できる。

建国当初から2000年頃まで，高等教育の目的はエリート人材を育成することであったため高等教育の規模は小さく，入学者選抜の規模も当然小さかった。その際，全国統一の試験問題を用いる方式は，適当だったと言える。

その後1990年代後半から，中央から地方へ，政府から大学へという権限の下方委譲が進行した[23]。また，この時期中国では高等教育の量的拡大が進んだため，多様な選抜方法を認める大学入学者選抜制度が求められたと考えられる。この流れの一部として，省独自の入試問題の作成が拡大していった。省独自の問題作成は，地域の特徴にあった問題を作成できる点が長所として挙げられるが，その一方で試験の質を全体で統一管理することが難しい。

このような状況を加味し，2010年代半ばから中央政府を中心として再び統一化の方針がとられている。しかしながら現在行われている統一化の方針は以前のものとは異なり，すべてが画一的に定められたものではない。ある程度の自由が認められていることは，例えば試験センターが作成した問題を使用する省を増加させようと中央政府は宣言しているが，現在でもまだ独自の問題を作成している省があることから，一律強制ではなく，ある程度省に選択の余地が残されていることが分かる。つまり，現在の統一化は，多様化をある程度認めながらも一定の共通性を保つことを目的とした政策であると推測できるのである。

おわりに

以上本論で中国の大学入試制度について，特に選抜性の高い大学の合格者に求められる学力水準の格差に着目しながら省別比較をおこなった。その結果明らかになったことは，次の三点である。

第一に，省間で平均合格得点率に差が生じている点である。しかも，その差は年によって逆転したりするようなものではなく，固定されている。

第二に，募集人員の配分は各省の受験者数に比例しているわけではない。学力水準が相対的に低いとされる省にも，できるだけ定員が配分される仕組みになっている。これは，他方で，受験者数が他の省に比べて多い省の募集人員の割合を低くすることにもなり，募集人員の配分が公平・公正さという点で議論の余地を残していると言える。

第三に，独自の試験問題を作成している省のほとんどは中国国内で比較的学力水準が高い。また，省内に選抜性の高い大学を含めた多くの大学が存在するため，それらの大学が所在地に多く定員を配分することで他の省と比較して選抜性の高い大学にも入学しやすい傾向にあるといえる。

以上から，中国の大学入試制度においては，学力水準が相対的に低い省へも募集人員を予め配分することで，選抜制の高い大学への進学機会の保証していることが確認された。こうした制度的優遇措置は，一方でその他の省の受験生からは「逆差別」として認識されている。

こうした状況に鑑み，教育部は公平性を保つために全国統一の問題を使用するべきだと述べている[24]。しかし，仮に省独自の問題を廃止し中国国内で統一試験問題を実施したとしてもそれだけで省間の格差がおさまるわけではないことが本論から推測される。これはつまり，試験問題の多様化は省間の格差を引き起こす一つの要因でしかない，言い換えると，試験問題の統一が合格者の学力水準の省間格差を解消するわけではない。省間の格差は，省別定員振り分け制度や各省の教育の質の違い，民族差など，大学入試制度や教育制度が複雑に絡み合った問題なのである。大学入試制度における公正さについては今後も検討していく必要がある。

【註】

1 **郜**丹丹（2017）「優質大学招生分省定額：実施現状，区域差異与優化路径」『重慶高教研究』第5巻，37-47頁。梅国師・金夢・請長青（2017）「国内重点高校招生名額指標分配研究－基于39所“985”高校招生計画」『現代教育論叢』第6期，54-62頁。篩亮・馬敏娜・付来強・陸聞雪（2017）「基**鮑**建生試題難度量化工具的高考試題難度分析」『化学数学』第２期，32-36頁。

2 唐漢琦（2015）「重点高校面向貧困地区定向招生専項計画的政策反思」『考試研究』第2期，13-18頁。楊怡・京生・平仏・覃鵬（2013）「新世紀以来少数民族高考照顧政策的回顧与展望」『民族教育研究』第3期，2013年，5-10頁。

3 大塚豊（2007）『中国大学入試研究－変貌する国家の人材選抜－』，東信堂，85-110頁。

4 文部科学省 (2010)『諸外国の教育改革の動向』，ぎょうせい，256-257頁。

[5] 教育部（2018）「2017年全国教育事業発展統計公報」＜http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/sjzl_fztjgb/201807/t20180719_343508.html＞（最終閲覧日：2019年9月13日）

[6] 小野寺香(2017)「中国の大学入試における格差是正措置」小川佳万編『アジアの大学入試における格差是正措置』，広島大学高等教育研究開発センター，26頁。

[7] 文部科学省(2010)『諸外国の教育改革の動向』，ぎょうせい，264頁。

[8] 同上。

[9] 近年では，985大学･211大学にかわるものとして「世界一流大学と一流学科（通称，「双一流」）」という新しい戦略も推進されている。これは，世界でも一流と呼ばれる大学の建設を目指したもので，現在42校が該当しており，985大学は全て該当している。

[10] 2016年に教育部が公布した通知では，一期校・二期校・三期校といったグルーピングをやめ，「本科」という一つのグループにするように指示している。これに伴い，現在は一期校と，従来の二期校と三期校を合併させたグループ，そして専科学校というグルーピングが多くの省で行われてきている。将来的には，教育部の指示通り一期校・二期校・三期校というグルーピングが廃止され「本科」という一つのグループになると考えられる。

[11] 小川佳万・小野寺香（2016）「中国高級中学の教育課程にみる多様化策－江蘇省の大学入試改革との関連に注目して－」，広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）』第65号，14頁。

[12] 例えば，北京市は6月23日に試験成績と合格最低ラインが発表される。そして6月25日から29日までの間にインターネット上で出願手続きを行わなければならない。

[13] 小川・小野寺，同上。

[14] 楠山研（2014）「中国における大学入試改革の動向－地方・大学への権限委譲に関する一考察－」，『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号，131頁。

[15] 搜狐網「北京和山東高考録取線差130分，山東三考生向最高法院状告教育部」＜http://www.sohu.com/a/231442590_821937＞（最終閲覧日：2019年9月13日）

[16] 国務院（2014）「国務院関于深化考試招生制度改革的実施意見」<http://old.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_1778/201409/174543.html>（最終閲覧日：2019年9月13日）

[17] 楠山研（2014），同上，134頁。

[18] 高三网「全国卷123難度系数 哪個最難」＜http://www.gaosan.com/gaokao/227747.html＞（最終閲覧日：2019年9月13日）

[19] 中国教育在線(2017)「清華大学2017年各省録取分数線」＜http://gaokao.eol.cn/bei_jing/dongtai/201709/t20170920_1555658.shtml＞（最終閲覧日：2019年9月5日）

[20] 自主招生在線(2017)「河北省2017年高考成績排名一分一段表（文理科）」＜http://www.zizzs.com/c/201706/17788.html＞（最終閲覧日：2019年9月5日）

[21] 中国では現在，戸籍管理制度により住居の移動が制限されているが，合格のしやすさ等のために不法に戸籍を移動させる「高考移民」という問題も生じている。

[22] 「事前」とは，一期校よりも前に選抜ができるグループである。一部の普通大学，国防大学（2017年に廃止），公安大学，司法大学，航空空軍大学が「事前科」に含まれる。

[23] 楠山研（2004），同上。

[24] 教育部（2015）「高考命題従分到統的歴史邏輯」<http://old.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s8623/201503/184748.html）（最終閲覧日:2019年9月20日＞